

○鈴木 洋史¹

¹東大病院薬

国際薬学連合（FIP）の活動目標の一つには、業務と研究の融合があげられ、2017年の世界薬科学会議（PSWC）では、薬剤師の創薬への貢献に関する議論がなされるものと期待している。本講演では、この点に関し、我々が進めてきたトピックを中心に紹介したい。最初のトピックは臨床上重要な薬物間相互作用に関するものである。添付文書上の記載のみでは必ずしも十分でなかったため、我々は過去に報告されたヒトにおける薬物間相互作用の論文を解析し、薬物動態理論に従って、その程度を予測する方法論を提唱した。本方法論は適正使用に貢献するばかりでなく、「医薬品開発と適正な情報提供のための薬物相互作用ガイドライン（来年度公布予定）」にその考え方が活かされ、製薬企業における医薬品開発にも貢献できるものと考えている(Hisaka et al., *Pharmacol Ther* 125:230, 2010)。また、臨床での発見が生理学的な理解につながることもある例を示すことができた(Takada et al., *Sci Transl Med* 7:275ra23, 2015)。我々は分子標的薬の毒性発症機構について、システムバイオロジーの手法を用いて明らかとし、その軽減法の提唱も行ってきたが (Amemiya et al., *npj Syst Biol Appl* 1: 15005, 2015)、この方法論は新たな分子標的を見出す上でも有用になるものと考えている。さらに疾患遺伝子の同定や治療標的の提唱(Ichida et al., *Nat Commun* 3: 764, 2012)などにも薬剤師が貢献すべきであろう。医療の進歩には、業務と一体化した研究が必須である。